



日本文学 与文学批评研究

刘利国
何志勇、编著



外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

日本文学 与文学批评研究

刘利国 何志勇 编著



外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本文学与文学批评研究：日汉对照 / 刘利国, 何志勇编著.

北京：外文出版社, 2011

ISBN 978-7-119-07325-5

I. ①日… II. ①刘… ②何… III. ①日本文学—文学研究—研究生—教材—日、汉②日本文学—文学批评史—研究生—教材—日、汉 IV. ①I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 221326 号

责任编辑：刘承忠 范淑娟

装帧设计：佳禾书装

印刷监制：张国祥

日本文学与文学批评研究

编著：刘利国 何志勇

出版发行：外文出版社有限责任公司

地址：北京市西城区百万庄大街 24 号 邮政编码：100037

网址：<http://www.flp.com.cn> 电子邮箱：flp@cipg.org.cn

电话：008610-68320579（总编室） 008610-68996182（编辑部）

008610-68995852（发行部） 008610-68996183（投稿电话）

印刷：肥城新华印刷有限公司

经销：新华书店 / 外文书店

开本：885×1230mm 1/16 印张：20.75 字数：280 千字

版次：2011 年 12 月第 1 版第 1 次印刷

书号：ISBN 978-7-119-07325-5

定价：38.00 元

版权所有 侵权必究

前言

文学，即“人学”。文学映写人心，记录社会，承载文化。日本文学研究可以使我们探察日本民族的审美心理，有助于我们认识、了解邻邦日本的民族性格、文化特征，预见日本民族的未来和国家走向。

日本学界对日本文学的综合研究，已经取得了相当大的成果，出版了多部日本文学概论、日本文学史以及文学批评等方面的著作。我国的日本文学及外国文学研究界，对日本文学整体的研究也取得了较大成果，近年来出现了多部文学史方面的著作，比如，《日本文学简史》（叶谓渠，唐月梅，2006）、《日本文学史》（肖霞，2008）、《日本近代文学史》（谭晶华，2010第三版）、《日本近现代文学史》（王健宜等，2010）等等。它们对日本文学的各个历史时期出现的文学事实进行了细致的梳理，运用宏观与微观相结合的考察方法详细阐释了各历史时期日本文学的发展脉络，极大地促进了我国日本文学研究的发展。遗憾的是中国日本文学研究界目前从整体上对日本文学理论与批评进行系统研究的成果为数尚少。

众所周知，文学的发展有其自身的内部规律。因此，要想揭示日本文学的生成、发展、流变及其特征，就必须从文学发展的内部规律着手进行系统地考察与研究。日本文学理论与批评研究的滞后，与我国日本文学研究的良好发展态势极不和谐，使我国日本文学研究在种类分布上存在着严重的失衡，也难以推进我国日本文学研究的纵深发展。

鉴于此，著者站在中国学者的立场上对日本文学理论与批评进行系统的基础理论性研究，以日本文学理论与批评为研究对象，系统梳理日本文学的生成、发展、流变的过程及其本质特征，在此基础上设专门章节探讨日本文学的审美理论与批评方法，以期全面系统地呈现出日本文学的面貌。

本书不仅是科学研究的成果，同时也是教学实践的产物。2000年以

来，本书以内部资料的形式，应用于大连外国语学院研究生教学中。为符合教学要求，及时反映最近研究动向，吸取最新研究成果，经过近10年的教学实践与检验、5个教学周期的增删与修改，终于在今年得以以全新的面貌公之于众。因此可以说，本书是学术研究与教学实践的结晶，寄希望不仅为研究者奉献一本日本文学研究的基本理论著作，同时也为研究生教育提供一本合适的基础理论性教材。

本书的主要内容包括日本文学领域综述研究、日本文学理念及其嬗变分代研究、日本文学研究方法论批评3大部分。在研究方法上，以理论与实践相结合为先导，注重本体论与方法论的共鸣。以中国文化语境为基本立足点，融汇中日文化视域，适当采用跨学科研究方法，将宏观与微观、抽象与具体有机地结合起来。通过多种研究方法的运用，从整体上系统考察了日本文学理论与批评的生成、发展、流变、特质、美学传统、发展规律。

本书是辽宁省教育厅人文社会科学研究创新团队项目《日本文艺理论与批评研究》（编号：2007T018）的结题成果。

本书的责任编辑邱丰在编写及出版过程中提出了许多宝贵的意见，并不辞辛苦，对近三十万字的内容反复细致地校改，终于得以赶在本世纪第二个十年的开启之年实现付梓，在此表示由衷的谢意。

本书由项目团队倾注了大量心血，结合多年教学实践编著而成，但囿于著者的能力，疏漏谬误之处在所难免，恳望广大学者批评斧正。

著者

2011年初冬

目次

序 説	001
第一章 日本文学の領域	003
第一節 日本文学の概念とその領域の拡大	003
一 日本文学の概念	003
二 日本文学の領域の拡大	004
(一) 横への拡大	004
(二) 縦への拡大	005
(三) 絵詞への拡大	005
(四) 南北への拡大	006
第二節 ジャル別日本文学の捉え方	007
一 韻文	007
(一) 歌謡	008
(二) 和歌・狂歌	008
(三) 連歌・俳諧・俳句・川柳	009
(四) 近代詩	009
二 散文	010
(一) 歌物語	010
(二) 神話	010
(三) 伝説・昔話	011
(四) 説話	011
(五) 物語	012
(六) 草子・読本	012
(七) 歴史物語と軍記物語	013
(八) 随筆	014
(九) 日記・紀行	015

三 劇	015
(一) 能・狂言・謡曲	016
(二) 歌舞伎・浄瑠璃	016
四 評論	017
第三節 日本文学の時代区分	018
第二章 日本文学の展開	021
第一節 日本文学の発生	021
一 発生の動機	021
二 発生の場	022
三 発生の時期	023
四 発生時の形態	024
五 口承文学	025
六 記載文学への展開	026
七 日本上代文学の諸形態	027
(一) 伝承説話文学	027
(二) 呪術文学	027
(三) 上代歌謡	028
(四) 漢詩文	028
(五) 歌論	029
第二節 韻文文学の展開	029
一 和歌	030
(一) 上代和歌	030
(二) 中古の和歌	033
(三) 中世の和歌	035
(四) 近世の和歌	037
(五) 近代の短歌	038
(六) 現代の短歌	039
二 連歌	039
(一) 連歌の源流	039

(二) 連歌の成立	039
(三) 連歌の隆盛	040
(四) 俳諧連歌	040
三 俳諧	041
(一) 近世の俳諧	041
(二) 近代の俳句	042
(三) 現代の俳句	042
四 狂歌	043
(一) 成立	043
(二) 上方狂歌	043
(三) 江戸狂歌	043
五 川柳	044
六 漢詩	044
(一) 『懷風藻』	045
(二) 漢詩文の隆盛と衰微	045
(三) 五山文学による漢詩文の復活	046
(四) 江戸漢詩	046
七 自由詩	047
(一) 近代詩	047
(二) 現代詩	047
八 歌謡	048
(一) 上代歌謡	048
(二) 平安歌謡	048
(三) 中世歌謡	049
(四) 近世歌謡	049
第三節 散文文学の展開	049
一 口承文学	049
二 物語文学	050
(一) 作り物語	051
(二) 歌物語	051
(三) 『源氏物語』及びその他の物語	051

(四) 擬古物語	051
(五) 歴史物語・史論	052
(六) 軍記物語	054
(七) 英雄伝記物語	056
(八) 御伽草子	056
三 自照文学	058
(一) 日記文学	058
(二) 随筆文学	061
(三) 紀行文学	063
四 説話文学	064
五 法語	067
(一) 法語の概念	068
(二) 法語の歴史	068
(三) 法語の代表人物と作品	069
(四) 文学史に於ける位置とその意義	069
六 近世小説の類	070
(一) 仮名草子	070
(二) 浮世草子	072
(三) 草双紙	073
(四) 読本	074
(五) 洒落本	075
(六) 滑稽本	075
(七) 人情本	075
七 漢文学	076
(一) 漢文学の定義	076
(二) 漢文学の時間的な流れ	076
(三) 漢文学の内容的な流れ	077
(四) 文学史における位置とその意義	080
八 評論文学	081
(一) 歌論	081
(二) 連歌論	086

(三) 俳論	088
(四) 能楽論	090
九 近現代文学流派	091
(一) 啓蒙期文学	091
(二) 写実主義	095
(三) 擬古典主義	097
(四) 社会派	099
(五) 浪漫主義	101
(六) 自然主義	104
(七) 反自然主義	110
(八) 新現実主義	119
(九) プロレタリア文学	122
(十) 芸術派	126
(十一) 戦中の文学	132
(十二) 戦後の文学	135
 第三章 日本文学の理念とその変遷	156
第一節 上代文学の理念	156
一 まこと	156
二 あかし、きよし、さやけし	159
(一) 「あかし」と「きよし」	160
(二) 「さやけし」と「きよし」	160
第二節 中古文学の理念	162
一 社会背景	162
二 文学の理念	162
(一) みやび	162
(二) もののあはれ	165
(三) をかし	166
(四) はかなし	169

第三節 中世文学の理念	171
一 社会背景	171
二 文学の理念	172
(一) 幽玄と余情	172
(二) 妖艶	174
(三) 有心	175
(四) 無常	177
第四節 近世文学の理念	179
一 社会背景	179
二 文学の理念	181
(一) 義理と人情	181
(二) 蕉風俳諧の諸理念	181
(三) 粹・通・意気・洒落	184
(四) 勸善懲惡	185
(五) 虚実皮膜論	185
第五節 近現代文学の理念	185
 第四章 日本文学と風土	 190
第一節 文学と風土	190
一 風土とは何か?	190
二 文学と風土	190
三 日本の風土と文学	191
第二節 四季自然の日本文学への影響	192
一 四季の観念	192
二 四季自然の日本文学	194
(一) 春	194
(二) 夏	194
(三) 秋	195
(四) 冬	195

第三節 風土に根ざした日本文学	196
一 地理条件と文学	196
二 上代文学	197
三 中古文学	198
四 中世文学	198
五 近世文学	199
六 近現代文学	200

第五章 日本文学における言語及びその構成と表現 … 202

第一節 日本文学と言語	202
一 漢字の伝入	202
二 訓読み及び仮名の発明	203
三 語彙 語法 音韻	204
（一） 語彙	204
（二） 語法	205
（三） 音韻	206
四 文体	207
五 修辞	209
第二節 日本文学における構想と表現	214
一 主題と叙述	214
二 事実と虚構	216
三 作品とモデルと源泉、典拠	217
四 人物描写	218
（一） 外面描写	218
（二） 内面描写	218
五 自然描写	219
六 風土と環境	220
七 作品に見られる時代的影響	221
第三節 日本文学の素材	222
一 自然	222

二 戦争	229
(一) 軍記物語	229
(二) 戦争文学	231
三 旅	232
四 離別 (生別・死別)	238
 第六章 日本文学における諸研究	245
第一節 日本文学研究の態度と方法	245
一 文学研究の態度	245
二 明治時代以後の文献学的研究 (フィロロジー)	246
三 精神史的研究	247
四 風土的研究	248
五 歴史的社会的研究	248
六 伝記研究	249
七 訓詁注釈と鑑賞批評	250
八 分析と総合の融合	251
九 文学史的研究	251
十 文学構造的な研究	252
十一 作品世界への参画	252
第二節 訓詁注釈的研究	253
一 訓詁とは	253
二 訓詁注釈的研究の必要性	253
三 訓詁注釈的研究の実態	258
第三節 文学史的研究	259
一 文学史の三種類	259
二 文学史研究の初期	260
三 全史的文学史	262

四 全史的文学史の発達	264
五 種類別文学史	267
(一) 評論史	267
(二) 和歌史	267
(三) 連俳史	269
(四) 演劇史	270
(五) 小説史	271
六 時代別文学史	273
七 これからの日本文学史	274
第四節 文献学的研究	275
一 文献学の意味	275
二 日本における文献学	276
(一) 芳賀矢一の文献学	276
(二) 現在の文献学	276
三 書誌学	277
(一) 文献の種類	277
(二) 文献の形態	277
(三) 文献の形	278
(四) 文献の紙質	279
(五) 写本と板本	280
(六) 書写区分	280
四 本文批評(Text kritik)	281
(一) 校訂	282
(二) 系統	283
(三) 校本	283
(四) 定本	284
(五) 定本作成の方法	285

第五節 文芸学的研究	285
一 日本文芸学樹立の背景	285
(一) 文芸学への関心の高まり	285
(二) 日本文献学への反撥	286
二 日本文芸学の樹立	287
(一) 対象	288
(二) 方法	288
(三) 目的	289
(四) 日本文芸学の定位	289
第六節 歴史社会学的研究	290
一 歴史社会学的研究の提出	291
二 歴史社会学的研究の主張	291
三 歴史社会学的研究の特色及び作品における体現	292
四 考証学的研究との関係	293
五 今までの歴史社会学的研究	294
第七節 民俗学的研究	295
一 民俗学の輸入	295
(一) 民俗学の定義	295
(二) 民俗学の輸入	297
二 日本文学の民俗学的方法	298
(一) 日本文学の民俗学的方法	298
(二) 日本文学と民俗学的研究	299
三 沖縄と民俗学的研究	300
(一) 沖縄の歴史	300
(二) 沖縄文学のおもろ	300
(三) 沖縄と民俗学的研究	301

第八節 比較文学的研究	301
一 比較文学とは	301
二 研究領域	302
(一) 伝統的研究領域	302
(二) 新しくできた研究範囲	304
三 日本における比較文学	305
四 研究例	308
五 比較文学を学ぶための文献案内	311
(一) 比較文学の歩み	311
(二) 外国文化との接触と受容	311
(三) 知的関心の広がり	311
(四) その他の分野	312
参考文献	314

序説

——編纂目的とねらい

世が早くも二十一世紀に入り、経済のグローバル化に伴って、世界文化においては、ますます多元化傾向が目立ち、単純文化の生存する場が無くなりつつある。これを背景にして、文化における一ジャンルとしての文学に対する認識をさらに見直す必要が生じた。

バブル経済の影響で未だに経済の谷底をさまよっている日本ではあるが、何十年に亘って築いてきた経済力と国力の影響のもとで、日本文化の海外輸出が目立ち、海外における日本語教育も盛んに行われ、日本語や日本文化はもちろん、日本文学に対する関心度も高まっている。わが中国における日本語教育は、学習者数から言っても、また教育機関数から言っても海外日本語教育の冠たるものがある。

一方、中国における日本文学研究は盛んに行われているものの、微視的かつある領